



第 14 號  
 月 1 回 發 行  
 ひの心を繼ぐ會  
 〒799-1336  
 住所:愛媛縣西條市  
 上市甲 720-1

綱 領

- 一 私達は明德を明らかにします
- 一 私達は國家の鎮護となります
- 一 私達は 大和世界を建設します

神道(五) (大和世界の建設)

古事記

北と一 はじめ

美斗能麻具波比 みとのまぐわい

—河圖・洛書—

以上の岐美二神の陽陰、左旋右旋、奇遇の数の神理により、一を北とした場合、次の圖が、神の世界(この世をふくめて)の實相であることが窺はれるであらう。

河圖は伏羲の時、黄河から出た龍馬の背に書いてあつた(背の旋毛とも言ふ)といふ圖で、その圖の陽奇陰偶の數に則つて卦を書き著を生じたものである。洛書は禹が洪水を治めた時、洛水から出た神龜の背にあつたといふ文。周易と洪範九疇との根元となる圖書で、古の識、數理の祖となるものである。龍馬、神龜は舟で神代大國主命、少彥名神が傳へられたとも言はれる。

河圖

「河圖は澳津鏡より象を顯して庖義氏の爲に、八卦の基本となる。澳都鏡が地に位して天を照すと云へり。ヒフミヨイウナヤコト、河圖大衍の爲に基本となる。此中に五、誠に衍母たり。本にして、地水火風空、しき浪する伊勢に在りては、土宮、瀧宮、角宮、風宮、高官の五宮なり。象を垂れて五行とす。水火木金土なり。聖德太子、此五行の象を取りて神明の故を誨ゆるなり。(慈雲尊者の神儒偶談より)」

竹葉 秀雄

第一章 農の哲學的考察

第三項 農本自覺

菅原 兵治

斯の如く本末關係を對比的に考へて行くと、茲に農本生活は如何なる點に其の重點を置くべきかといふことが、自ら明かになつて來るだらうと思ふ。此の「本」を基調として生じた文明が、實に我が東洋文明であり、而して之に對して「末」を基調として生じて來たものが西洋文明である。かるが故に西洋文明は巧言的表出を重んじ、理智的理論を重んじ社會的なる顯現を好み、自然に對する人間の征服勝利を誇り、貨幣經濟を重んじ、法律制度を重んずる。隨つて當然的な物質を重んずるのである。それ等の基調の上に立つて發達して來たものが即ち都市商工文明である。之に對して東洋の「本」の文明は朴訥を重んずる、退藏を重んずる、自然を重んずる、自足生活を重んずる、方策よりも人物を重んずる。隨つて物質よりも精神を重んずる。——茲に東洋文明の基調があるのである。此の東洋文明の「本」の本質に立つておのづから發達して來た文明が、實に彼の西洋流の都市商工文明に對する我が「農本文明」なのである。「農は國の本なり」といふ古來の教へは、斯かる原理の上に立つて、初めて理解さるべきものである。それを唯だ單に農業は衣食住の原料を生産するが故に國の本であるといふ様な考へは極く皮相なる一面的把握に過ぎない。東洋本來の農本思想はかゝる程度のもではない。それは近來の西洋學的なもの考へ方に馴らされた人々の重要學派的な程度では容易に三時得られない玄堂である。中世期に於て「農奴」といふやうなものを有し、現在に於ても亦原料生産の農業労働は或はアフリカなり、或は豪州

なり、或はカナダなり、或は印度を始め東洋各地の植民地なりの彼らの所謂未開民族に行はしめて、自らは其等より得る原料に加工し交換する所謂第二次生産たる都市商工的生活によつて生活しようとする西洋民族の文明とは甚だ其の趣を異にする天地が存するのである。従つて西洋文明の特徴は其の商工的なる點―詳言すれば、工場文明の發達に伴ふ機械文明の發達。商店文明の發達に伴ふ銀行文明の發達。即ち金融資本主義的商工文明の發達にある。（此處に又反面の缺陷もあるのであるが。）だから此の點より見るならば確かに商工の文明に於ては西洋が先進國であると言つてよいであらう。

之に對して東洋の文明は、生ける天地に直接に仕ふることによつて、新たなるものを生み出さうといふ農本生活に其の特徴があるのである。かくて以上の如き深い意味に於ける農本文明に於ては敢然として起つて以て西洋民族を指導し返すだけの抱負と氣概と而して經綸とを有たねばならぬ。而も今方に其の時である。

殘月淪西嶺 殘月 西嶺に淪み

旭日上東天 旭日 東天に上る

時命今方至 時命 今方に至る

山澤起英賢 山澤 英賢を起す

今こそ日東健兒が日東的自覺の上に、――本來の農本的自覺の上に翻然として歸るべき秋である。而して時代の潮流は今や方に大きくこの方向に向つて汪然として濤打つて進みつゝある。

都市商工文明に對する農本文明の擡頭――

物質文明に對する精神文明の擡頭――

西洋文明に對する東洋文明――

其の最も醇乎たる日本精神の勃興。

是等の現象は、實に前述の「本」に復らんとする大いなる時代の滿潮に乗じての大いなる濤のうねりであるのである。

かゝる見地に立つて從來の私共の農本生活を顧みれば、甚だしき誤謬と自己喪失とがあつたではあるまいか。地中の根が愚かにも地上にはい出して一朝の葉や花を咲かしては喜ぶような過ちを敢へてしたではなかつたであらう

か。青森へ歸らうとする者が東京行の列車に乗つた失敗をしたではなかつたらうか。「本」であるべき農道生活をして徒らに「末」に趨らしめた失敗はなかつたであらうか。此の本質的な誤謬、本質的な過失、之を根本的に訂正するに非ざれば、それ恰も「女」が只管に「男」の眞似をしようと思慮る愚擧を敢へてなすやうなものではあるまいか。女は如何に其の言語用紙の外形を男に眞似しようとした處で、どうしても男ではあり得ないことを嘆ずるよりは、翻然として女は女に歸つて、男が如何にしてもなし能わざる子を生み、子を育てるといふ女性獨特の本性を長養して、之を以て誇りとすべきではないか。此處に眞個に氣附いて歸農する（眞個に農道に歸依する）に非ざれば、眞個の農本生活は生れ出でない。而して今こそ實に農本文明復興の拔本塞源の時である。かかる心根を以て次の呂氏春秋上農篇中の文を熟讀玩味せば、農本生活の第一義に參ずる好箇の入門となり得るであらう。

## 學ぶべき時代

三浦 夏南

竹葉秀雄先生著『土居清良』を再出版するにあたり、最初に頭に浮かんだ疑問は、何故に先生は戦国末期の英雄土居清良を取り上げられたのかといふことである。勿論清良公は先生の故郷三間を代表する戦国武将であり、竹葉家との縁も浅からぬこと疑ひないが、それにしても戦国時代といふものが、國體の闡明を自らの天命とされる先生にあつては馴染まぬものを感じさせた。江戸時代以後に盛んになつた國體の學問にとつて、標準とすべき時代は建武中興、或は大化改新の時代であつた。この時こそ天皇を中心とした祭政一致の我が國の眞の姿が現れ、古事記に描かれた理想の一端が顯現された時代と考へられた。それに對して、平安時代、鎌倉時代、室町時代は我國の眞に歩むべき道を外れた時代と捉へられ、ましてや室町末期から戦國の世はその名の通り戰の絶えぬ亂世として、取るに足らぬと見做される傾向にあつた。

然しながら、『土居清良』を読み進めて行く中で、我々が眞に考究せねばならぬ時代は戦國時代であり、鎌倉時代であり、平安時代ではないかと思ひ始めた。建武中興を例に挙げれば、大楠公の活躍が讃へられ、菊池一族の純忠が稱へられるが、混沌の世を生きる我々にとつて眞の意味で爲になるのは、如何にして楠木一族が生まれ、如何にして菊池一族が成つたのか、その原點を確かめることである。其れを確かめるには、鎌倉平安と遡つて楠木一族が一族として生成して行つた過程を研究しなければならない。これは明治維新でも同じことで、尊攘の志士の活躍する幕末ではなく、志士達の思想基盤となつた國體の學問の發生した江戸初期に目を向けねばならぬし、さらには竹葉先生の如く、その學問發生の基盤となつた戦國時代に著目しなければならぬ。或は源平兩氏が一族をまとめあげて行つた過程も参考になるだらう。今までは源平が力を付けて後、中央にて鬭争した榮枯盛衰の歴史に注目が集まつてゐたが、我々が注目すべきは源平兩氏は如何にして一族を統一し、あれほどの勢力を持つことが出来たのか、それを更に遡つて考へることである。これには軍記物語を読み込んで行くだけでなく、民俗學の視點からも研究せねばならぬので、我々の大きな課題となるだらう。そこから、家族制度、生活

様式、學問鍛錬等、現代に生きる我々にとつて、實際的な智識を得ることが出来ると思ふ。理想論を抽象的に描くよりも、亂世の中で如何にして、家族、一族を統一して來たのかの實際を知る事は極めて大切である。一例を挙げれば、夫婦相和し、相互に尊重しつつ、互ひの自性を全うするは理想であるが、實際の夫婦は時と共に慣れば、女性が力をもち、得てして委縮し指導力を失ふのが男性である。故に女性を抑へて男性を立てる禮儀が家法となり、制度となり、慣習となる。これは男尊女卑の如く外から見者には思へるかも知れないが、家族が統一されて生活して行く實際であり、その實際から現はれた生きた仕組みだと思ふ。これは夫婦だけでなく、親子、兄弟、あらゆる關係に言へるものではないか。我々は時代の外から見た理想論を描くのではなく、實際一族として生活して來た時代の中に入つて實踐的制度を學ばねばならない。

我々が戦國時代に學ぶべき理由のもう一つは、時代は没落の果てに隆盛し、興隆の極みは轉落へと繋がるが、決して夏が春になるが如く引き返すことはないといふことである。冬を忍んでこそ春も訪れるが如く、時代は昏迷を極めなければ、次なる展望が開けることはない。だからこそ我々は混沌の深まる中を生き抜くことを標準としなければならない。明治の維新を理想と仰ぐならば、戦國の世を生き抜き、江戸時代三百年の積み重ねを経なければ、決して眞の維新の風は吹くものではない。それならば、戦國の世を如何に生きるべきか、これが我々喫緊の課題となるであらう。決して今の時代を改正、改良することでは、活路を見出すことは出来ない。なぜなら時代は夏から、秋、秋から冬へと變轉しつつあるからである。夏の常識は冬の非常識となる。常識が非常識となり、非常識が常識へと轉ずる世界こそ、戦國時代であり、我々の生きる時代である。移民の問題と言ひ、少子高齢化の問題と言ひ、日本の抱へる問題のどの一點を取り上げても、時代は亂世へと突き進んでゐる。これを悲觀し、絶望するのではなく、その時になすべきことをなし、次へと備へることが肝要である。變轉し、没落する世であれば、あるほど、去今來を通じて變はらぬものが身にせまつて必要とされて來る。それが何であるかを學ぶには戦國時代は重要ではないか。『土居清良』を読み、先生にさう諭され

た氣がするのである。

この研究は博大なものであり、その実践は三百年を要する。あまりの大きさに壓倒されるが、ひの心を繼ぐ會の必須課題の一つとして準備して行きたいと思ふ。

### とよくも農園だより

三浦 美恵

日ごとに夜明けが早くなり、先月より日差しも強くなってきました。冬にはほとんど生えなかつた雑草が勢ひよくのびて来てゐます。日中は作業しづらい日が増え、朝早くから仕事をし、晝は自宅でゆつくりした後、夕方涼しくなつてから再度畑に出るスタイルに切り替へつつあります。今年もとよくも農園に、本格的な夏が訪れようとしてゐます。

今月は、葉物の産直市への出荷、ケールの収穫、ネギの定植、ハウスの準備、春野菜の収穫、夏野菜等畑の管理を行ひました。

まず苦勞をしたのが産直市への出荷でした。葉物は水分量の多い朝に収穫しなければ萎びてしまふため、朝四時に起床し、五時から収穫、そして開店時間前に複数の産直市に持つていき、夕方は賣れ残つた野菜の回収へ：これが想像以上に大變で、それだけで半日が終はつてしまひます。

次にケールの収穫です。冬に定植したケールは巨大な葉をつけ、今にも葉が地につかんばかりです。そのケールも、回収時間間に合ふよう早朝から急いで収穫してゐます。週に二〜三回あるケールの収穫は體力的にもきつく、仕事が終わるとくたくたです。

そして新たに始めるネギの定植。地元の青果會社に出荷するため、ケールのやうに出荷時間も決まつてをらず、また産直市のように賣れ残る心配もなく、安心して収穫と出荷ができさうです。今後の三浦家の主軸となるかもしれません。

また、先月購入した土地へのハウス建設に向けて、水の設備を整へたり、お金の申請をしたりと事務的な手続きも同時に行つてゐます。



そんな大忙しの一カ月でしたが、疲れた身体を癒してくれたのが、朝露に濡れた瑞々しい春野菜でした。ブロッコリー、サニーレタスを初めとして、白菜、レタス、蕪、大根、キャベツが次々と生り、畑は大賑はひです。今年は土づくりや肥料に改善を加へたため、昨年は失敗に終わった野菜も収穫することができました。自分たちで育てた野菜が食卓を彩り、その日の農作業であつたこと等話しながら食べ終はる頃にはお腹も心も満たされてゐます。様々なものを食べ始めたばかりの息子も、新鮮な自分たちの野菜を美味しくに頬張つてゐます。

かつての日本では、このやうに家族で農作業に励み、自分たちの畑で採れた野菜をいただきながら他愛もない會話をして日々を過ごしてゐたのだと思ひます。私たちも農業に關して素人で、苦勞することも多いですが、このやうに家族で仕事ができることはとても幸せです。息子たちにも簡単なことから手傳はせ、家族全員が農業を通して一つになれるやう來月も邁進したいと思ひます。



### ★活動報告

- ・五月十四日(火) 勉強會『農士道』を開催。
- ・五月二十八日(火) 勉強會『大學』を開催。

### ★今後の豫定

- ・六月四日(火) 十九時～二十一時 『農士道』  
松山市男女共同参畫推進センター☆コムズ三階會議室 一―二  
(住所…愛媛縣松山市三番町六丁目四―二〇)
- ・六月十八日(火) 十九時～二十一時 『大學』  
松山市男女共同参畫推進センター☆コムズ三階會議室 一―二  
(住所…愛媛縣松山市三番町六丁目四―二〇)

### ★一燈照隔 萬燈照國

ひの心を繼ぐ會は竹葉秀雄・近藤美佐子兩先生の精神を繼承し、發展させることを目的として生まれた會です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが國を照らす「ひ」になることを願ひ、活動を行つてをります。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますやう、宜しくお願ひ申し上げます。

### 年會費

- ・一般會員 三千圓
- ・賛助會員 一萬圓
- ・特別賛助會員 三萬圓
- ・支援會員 一萬圓

